



平家物語巻第六

特 別  
^12  
5098  
5



12  
5098  
5

平家物語卷第六

新院崩御

紅葉

藁文之前

小替

間

九列軍馬

入道之死去

慈心坊











数後ろくんとくろく一跡ありまこと  
とくのふとりのみまもむけの信必義人  
と極いありまれまう少とりしきりま  
天氣はくつんけか打ふまをけり  
林も小煖酒と燗紅葉とと云待れん  
とももおもひにけりともくまや有  
うまはらあわわととせぬ敷感よ  
かつととにけりく勅部いありま  
お元二年此冬あましくまよとま  
心

く遠の行幸は成りまろくか  
鶏人鳴唱ふまの勢の眠とけり  
志のまよとといははは寤えり  
解の寝くまろくまろく先や  
あまの清くまろくまろく創  
聖代国生れ氏古くまろく  
あまのけりまろくまろく  
あまのけりまろくまろく  
あまのけりまろくまろく  
あまのけりまろくまろく



良深更わあしく人静しく程よく女は叫  
 ぶ此志断つて正格奉れし程殺上人を  
 中まじしうらうらひさす上は中は  
 叫ぶ物志すそとあふ人しくあま  
 うまとい上ゆきさう殿上人上目  
 り下上目志あう急廻く人さう  
 むさす急の女志の志持の蓋さけ  
 うらう信んそさう上目志さ  
 ぶさううてととあふと回ささ

へこそ毛いまは女房れ枯れあは  
 てゆつうあふ志とさあ人あは  
 とは今朝も然男三人の程あ  
 奪あうああうさやとさあ  
 うこそああめあを釣いめさう  
 志うを釣いめさうき人し  
 と志とあふはさうと目  
 志能女は志とさあ  
 は中と美さうとあふ

らん何れは然としてるもはるん昔は竟  
代若民は竟るんをいひてはるん  
皆淳ありきとれ朕う世に民は朕うを  
いひてはるんすうおと斬志物とてはるん  
と犯す是我う取とありてはるん作る  
とてはるんすうおと斬志物とてはるん  
とれはるんすうおと斬志物とてはるん  
と後の子とてはるんすうおと斬志物とてはるん  
ありてはるんすうおと斬志物とてはるん

ううはるんと被女の事と下竹りすとい  
てはるんすうおと斬志物とてはるん  
目あ素粒ぬ付とてはるんすうおと斬志物とてはるん  
危の族の男族の女よとてはるんすうおと斬志物とてはるん  
はるんすうおと斬志物とてはるん

葵く前  
何れも是は是ありてはるんすうおと斬志物とてはるん  
中宮ははるんすうおと斬志物とてはるん

うらほつてさうらうと幸此中よ羨れ  
とておれと志をのり事をさす  
白地の事とあるくさつと書ゆらさし  
くまのるは女中へさきす也  
くあもをわくくうは福志いり  
云女とらんて悲歎する事あり色女に  
あり乞い長甘みなりさすは清右を  
もやとておれんとて由ゆい羨女  
清みんとも叫ぶる主上は中傳やう

そはゆいおれくさしきりさり毛いり  
志ありはいとせおつるゆいりすは母れ精りと  
標せおれをいれくはさき志のつとせ  
新いりりくは倍清とてはさく中  
すは寝し打しけさくさりさくは  
標標教は山中と中はれくえんを  
かひんくさきり事れ後を新くか  
しあく熱きりんとてあさくは由を  
ては標し教えよしけて思ふまじり

う事と様とせ針くいはれ程う海とせ針  
（き俗性為くうくみなる千共村人と日  
より一極の基層う程子よ位へと生  
極より一と針多りまはいとと作あり  
うらむ位と去く極いまうころ毎の  
ありあううう在位の時と極と志の  
たはら削あり我母小娘うらん極代  
乃積り極多うとと終とと中を極入  
と針う千開白友といとと乃力と針う千

この海とやうくう退ありを何ととと  
てあむれはいつとととみうりあ層ありれ  
海と白い海よりあうりあ古方とととと  
わらう一田石わく  
あうらまてとあうわわうり我意と  
あをうらと人のうらまて  
程上人をと針と養れ前よあふ養  
れ前と書と針の削ありあうらわ  
ありとと里中わらう十余目を

ては書と教とわかれし終りては  
物も有りまじし中侍人の中侍も  
此類に沈みせし死をまゝ一日其の  
およよい妾が百年此身と程を  
幸とやいへば彼唐に太宗の鄭仁基  
娘と元親殿へ入るんとせし時魏徴  
公貞女殿に陸氏と名くせりと練  
小僧く教へ入るんとせし幸と名く  
らもありしゆにわあうせし人の心

つねこそ皆人下合せり

小僧

君の妾を乃前幸小僧に沈めし終りては  
清くせば金もきりし中侍すし寝し打  
とけあきりし中侍中宮の御前  
はういふや此女房を沈めし終りては  
中侍も御前の中侍も成花の口じとあ  
小僧のよきこと禁中一乃美人并あ  
琴のよき事とせし終りては



小待<sup>こまち</sup>は<sup>あ</sup>種<sup>たね</sup>と<sup>も</sup>也<sup>なり</sup>と<sup>も</sup>せ<sup>ん</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>思<sup>ひ</sup>  
ま<sup>ま</sup>と<sup>も</sup>先<sup>ま</sup>我<sup>が</sup>柄<sup>がら</sup>と<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>も</sup>向<sup>むか</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
ま<sup>ま</sup>と<sup>も</sup>せ<sup>ん</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>將<sup>まさ</sup>の<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>我<sup>が</sup>氣<sup>き</sup>  
と<sup>も</sup>替<sup>か</sup>り<sup>も</sup>也<sup>なり</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>人<sup>ひと</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
よ<sup>よ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>上<sup>かみ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>人<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>醜<sup>みにく</sup>  
志<sup>こころ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>

我<sup>われ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
あ<sup>あ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
今<sup>いま</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
か<sup>か</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
只<sup>ただ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
不<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
あ<sup>あ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>  
と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>

なり又中宮内裏へ海へせ針へ二人あり  
解と小指れありめくまきく入るるを  
く小指あり人限りいせれ申よ  
かりまうしとい小指とく人て何とを  
さいつ年とそ実いさう小指ありは申  
傳ゆ新く我身れ老く角も成らん  
ふりあしせん忘れ申すそんらうも  
ましとるを言くくよ内裏とい母いつ  
針と昇もす指めを失くまきううまの

小指う幸し回石沈ませありく信持らん  
し中宮へすう寢く打くもあたら  
より幸し入るる中傳ゆは  
まの小指う幸し回石沈ませありん  
まのしんよあきくいしてはふりあ  
かりを一人もあきくまきすし氣也  
らまきううは下とてそ福も袂に  
入るる指成し指くまのしんあ  
禁中れも換忌くく福もまのしん



事息院中を新く書いあらふの如く  
小此入るをむ来るにむ教と書す  
七月の更なるはとむをむ院の八月  
十日作の事あらむ指とむあらむと元  
其の更なる是て月より元そ勝なり良  
深更なるはとむと人をもとくと作  
多の事あらむとあらむとあらむと良  
あらむと彈正大弼仲國と書す  
近人の如くはとむとあらむと仲國

事息院中を新く書いあらふの如く  
小此入るをむ来るにむ教と書す  
七月の更なるはとむをむ院の八月  
十日作の事あらむ指とむあらむと元  
其の更なる是て月より元そ勝なり良  
深更なるはとむと人をもとくと作  
多の事あらむとあらむとあらむと良  
あらむと彈正大弼仲國と書す  
近人の如くはとむとあらむと仲國

若くはありとてい争う極く尋常なりと  
久きとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は

て尋常なりとてい争う極く尋常なりと  
久きとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は  
人若くはありとてい争う極く尋常なりと  
形上の漢をい散るとして子仲國は

とくしおしくあこうき行小麻呂は山室  
と録しんぼん儀ありの林の書こ  
しとる書しあひあは片折さ志つら前  
よん分ていふる老もやわつらんを  
ひんくやまらわ琴平川高をせ  
るさり年月のああり年月のあんぬ  
はそつもつくあは書あんと人もや  
あひつひひらんそ七秋西堂と始  
らして書くと廻く人まはれ小徳

教中ゆり人うあまありる内裏と  
指し頼もあふりておの君の金  
いまへ不逢にわたりしゆりあひらん  
と中しあひりおん老よりいほ  
し高ひあやと思人共は流く王上  
たふぬあを浪と人未の家をあは流  
とわくをうまといふるあへんあ  
もや系あひらんそ七流れんと  
ひわくゆあは流りそく松の一村あり

中曲小琴そ字えううう管風  
松風うううう人あ琴うう喜ううう  
と思ふは強ととやあてううわうう  
所あうう内曲小琴ととそわうう  
少しまわううううす小持は友の瓜  
樂の何そとけううはとあてて  
とととととととととととととととと  
とととととととととととととととと  
幸よ伴園いとうしやい人のうううう

幸よ思ふとととととととととととと  
喜丸馬うううううううううう  
まの琴とととととととととととと  
ととととととととととととととと  
あうううううううううううう  
あうううううううううううう  
とととととととととととととととと  
扇の教いとううううううううう

とくしり四使新りりあへるもあはしく物守  
いし樹ゆし門遠くてもやまらんと  
多は仲國也事せし門くまき鎖され  
ていあしりりあんとやまらんと  
あ者くそ入あ者り小指たあの地まじり  
書たはああ湯くくくくくくくくくく  
新くあち極看し七海くせあひくそや  
まのい事たあ思は沈くせ新く倍押さん  
しとあまらるくすあ履く打さけあらす

いんういあえく思はまじりくいり書成新  
あてあまらるくくあはくせあつらあ  
あははは書くまらるくくくくくくくく  
あまらるく書くあはははははははははは  
てははははははははははははははははは  
てははははははははははははははははは  
よ打をくくくくくくくくくくくくく  
あまらるくく書くあははははははははは  
くくくくくくくくくくくくくくくくく



リさるゝめす此はしりちるれさる水田舎  
之の年一とらたのう振ふく口振ふんと  
所うんそくしん屋らんあつてうしんす  
まれ女布お揃くくは女布お揃くく  
うすくしては具うありううめふうら  
ぶうたんとどし男とるる我身西裏  
へゆりありのう建てあつてわかの  
そのようう察れあつてつるうせは女房  
う将來と縁馬の清子は投をうとて

の寝いとううみぬらん術てうりへん  
と思ふあ殿のうと行程も不知夜月い  
あまうと海うる西う中門へう入  
まのあうあわうてうせはうす仲間と  
あ約教とて夕暮のう屋あをううあ  
りありのうあうあうあうあうあうあ  
かううあわうあうあうあうあうあ  
あ月ああすううああああああ  
ああ仲間あうあうあうあうあ





乃為清そくそ學新むるう之現世境生  
相まいつとそひありううはる舎此院り  
人そとまきあくと新むありう一系物典  
あは續福と家護摩の重修、積らせ  
あひより入るに因を比公のまうゆ振舞  
つまうり中と雅室醜くや思ひん  
安藤君四散時乃内約う腹の娘と年  
十六の女あひうるとは皇人あらせらけり  
んそと標まきま女房と、ねる竹らり

乞備ゆ入内乃儀式と遠と新院法と也  
新く来七ヶ日そあそとよりふ人の所、  
は秘あうしとそりまは

九別軍馬

支程とそ信法園本曾とし尸山中か  
義伴と云津氏あそとあえり毛真  
條乃判友乃美り次男古堂勿れ先生義  
子あうり父美子いそ之妻二年九月母  
うの中義是園大苑う敏ゆ西原た義

平中絶く村をぬき付美仲終く二歳  
次よりと母懐く信濃へ越す曾中三  
益をゆきゆくは子そとく人中成りく  
人せ終へと云ふは益を甲斐と教へ  
松尾氏母余平養育三月ありより老  
少のまじり中君力大かして力人か勝毎り  
謀りて巡り十幸も田村利仁より越り  
将門隆範より打過り人出まといひ  
して平家と滅し世代討捕りやまんと

そゆりより養父の益をよ中成ゆのこ  
松尾実人とも機八懐ぬの末丸光中  
まこと養育しゆくはかぬも昔くか先信法  
國と根井より小孫を重直此行親と先  
とて國中はか本常よはく上野の  
國と相波より高廣澄と先と  
田子と郡より古常力先生美中  
ゆりしゆゆゆ本常よ付本常とゆ  
信濃よりぬきゆくはかぬも昔くか先信法

そまじり部を程とくりくまの平家の人  
とあふ人ともそ隆くまうり入る相國  
は中兵衛新田の信濃一國とそ生國を  
あてしあふ日余れあふ率う決るを  
中より越後の國の役人候の長官御長  
と与五將軍に未葉多勢にあふ人  
たうまの能あふとれくあてりし作下  
とれあふりんとりあふりしとれくあてり  
あふきとそあふり率うあけりあてり

同く二月一日日御傳り高野長越後とあ  
ふ同く三日日深目初まて越後と高野  
越後あちか候とあてり七日日高野  
中作候とそ勝池屋に并ぬ不動のまの  
意救あふ書信養志とあてり作とあてり  
あふりあてり率れあふりんとりあてり  
し人うりあてり率れあふりんとりあてり  
りうりあてり河田源氏あてり控入る  
あてりあてり川判代あてり五百金

上 謀叛 殺す 中 志 願 高  
 勤 康 一 子 謀 叛 七 日 九 日 西  
 乃 王 下 殺 せ ぬ 責 せ ぬ 基 入  
 乃 補 せ ぬ 子 是 所 判 官 候  
 蓋 上 痛 自 負 せ ぬ 生 捕 せ ぬ  
 是 日 四 日 十 日 中 基 入 首 大  
 路 上 後 上 謀 叛 賊 首 大 路 上 後  
 上 事 一 端 河 天 皇 上 討 討 馬 方 源 乃  
 親 首 大 路 上 後 上 多 かり 上 夜 其

上 謀 叛 殺 せ ぬ 中 志 願 高  
 勤 康 一 子 謀 叛 七 日 九 日 西  
 乃 王 下 殺 せ ぬ 責 せ ぬ 基 入  
 乃 補 せ ぬ 子 是 所 判 官 候  
 蓋 上 痛 自 負 せ ぬ 生 捕 せ ぬ  
 是 日 四 日 十 日 中 基 入 首 大  
 路 上 後 上 謀 叛 賊 首 大 路 上 後  
 上 事 一 端 河 天 皇 上 討 討 馬 方 源 乃  
 親 首 大 路 上 後 上 多 かり 上 夜 其

善清宗光然野別直法僧也一平家と  
能く深茂か回心と申す力く入り東國  
小國惟つこしくか教ありむ善海西海角  
乃こしく言夷既く執ぬ世の只しく失るん  
とすあかありやせんとも強きこり

入るる死去

日と申日自平家れ一門大波羅か死集  
て作しとる東國の軍れ括りゆか  
と伴定あり中少く前右大将宗盛に

進むくらしりるる付子に夜をまてて人  
在莫くもり仕中く事毛とす今  
在い宗盛可無向けらりまねいんて文神  
とを毛尋もりり人くゆかやとら東國  
か背をより老一人のいまうとらりあり  
ふれい入る不辨候ひ能く事官のゆり  
引茶の角のさうんともり種れ人くと  
皆宗盛と比んてまてく東國中教向と  
有りとも空いさうの月女大のゆり

て賜たまはむとてや打うち人ひとと志こころふいさうのま  
我われの夜よを計はかり入りいる敵たけは病やまひ付つけ  
る平たい家けの門かど計はかり入りいる東あづま國くに下くだ白しろと止とどま  
る月つき廿ふた七日なな入いる病やまひ付つけぬし実まことを  
象しやう中ちゆうのよと下くだととい志こころはけりいと人ひとはけり  
事ことよしくとそり入りいる病やまひ付つけぬ  
日ひしりちとく湯ゆ水みづととく香か入いりけり  
身みは油あぶらのちと事こといと火ひと熾さかま回まわり  
あめり口くち又またもいと事こといと志こころはけりいと

適あて糸いとありあめり志こころはけりいと人ひとはけり  
多おほくあめり孫まごとて我われも入りいる事こといと  
とめはけりいと計はかり全ぜん銀ぎんの計はかり綾あや  
屋や錦にしん練れん牛うし馬ま六む畜ちゆうの賊たけと不ふ惜しやく盡じんは盡じん  
社しゃへ授まからまはさる力ちから神かみ力ちからいと志こころ  
とそり新あらたの形かたちり志こころはけりいと人ひとはけり  
とそりあはけりいと計はかり入いるお国くに  
即すなはち入いる大おほき計はかり入いる大おほき計はかり  
あめりいと志こころはけりいと人ひとはけりいと

ねまの<sup>やち</sup>宿<sup>し</sup>と<sup>ん</sup>て<sup>ん</sup>し<sup>ま</sup>の<sup>た</sup>ん<sup>た</sup>ん<sup>と</sup>そ<sup>ん</sup>  
 う<sup>む</sup>う<sup>り</sup>是<sup>れ</sup>神<sup>と</sup>ま<sup>る</sup>日<sup>乃</sup>大<sup>明</sup>神<sup>と</sup>ら  
 う<sup>も</sup>也<sup>新</sup>か<sup>し</sup>こ<sup>と</sup>醜<sup>か</sup>  
 こ<sup>も</sup>也<sup>回</sup>至<sup>二</sup>月<sup>五</sup>日<sup>平</sup>家<sup>男</sup>女<sup>一</sup>而<sup>中</sup>  
 所<sup>一</sup>は<sup>と</sup>の<sup>悲</sup>し<sup>と</sup>新<sup>し</sup>と<sup>申</sup>斐<sup>友</sup>そ<sup>あ</sup>を<sup>と</sup>  
 入<sup>心</sup>乃<sup>水</sup>れ<sup>し</sup>二<sup>位</sup>乃<sup>い</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>ゆ</sup>物  
 是<sup>も</sup>多<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>思<sup>つ</sup>ま<sup>れ</sup>た<sup>は</sup>花<sup>衣</sup>  
 立<sup>ら</sup>ふ<sup>毎</sup>し<sup>は</sup>雨<sup>乃</sup>日<sup>ゆ</sup>そ<sup>む</sup>て<sup>粧</sup>  
 こ<sup>も</sup>あ<sup>ふ</sup>ん<sup>と</sup>也<sup>様</sup>く<sup>侍</sup>ぬ<sup>か</sup>物<sup>と</sup>

七<sup>と</sup>思<sup>ひ</sup>ま<sup>ん</sup>す<sup>ら</sup>の<sup>事</sup>と<sup>い</sup>実<sup>ひ</sup>と<sup>れ</sup>  
 物<sup>と</sup>し<sup>と</sup>後<sup>と</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>ん</sup>と<sup>り</sup>と<sup>也</sup>新<sup>し</sup>  
 多<sup>ま</sup>入<sup>る</sup>世<sup>の</sup>と<sup>ら</sup>も<sup>と</sup>七<sup>と</sup>肌<sup>け</sup>  
 切<sup>と</sup>れ<sup>息</sup>と<sup>侍</sup>て<sup>実</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>は</sup>佛<sup>元</sup>  
 平<sup>治</sup>し<sup>り</sup>ふ<sup>く</sup>也<sup>家</sup>世<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>は</sup>一<sup>年</sup>  
 樂<sup>業</sup>の<sup>昔</sup>也<sup>と</sup>も<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>  
 つ<sup>ら</sup>事<sup>た</sup>也<sup>と</sup>ち<sup>か</sup>け<sup>た</sup>交<sup>り</sup>た<sup>れ</sup>  
 死<sup>と</sup>逝<sup>ら</sup>し<sup>事</sup>あ<sup>ら</sup>入<sup>る</sup>一<sup>人</sup>の<sup>浪</sup>  
 袖<sup>い</sup>と<sup>交</sup>り<sup>て</sup>入<sup>る</sup>也<sup>は</sup>

いぬさうんてんてん後修として書仏塔と  
倍養と人うす入をと入をと入を  
まんとり人てん宗盛とと將と  
東國と教向一極君の普請依の極  
と仰く塔の形よしけとせよと  
何れも持しりしと後生に教養  
野人等とこと実いりりめを  
深き中か思つてさうり  
いぬさうんてんてん後修として書仏塔と

いぬさうんてんてん後修として書仏塔と  
倍養と人うす入をと入をと入を  
まんとり人てん宗盛とと將と  
東國と教向一極君の普請依の極  
と仰く塔の形よしけとせよと  
何れも持しりしと後生に教養  
野人等とこと実いりりめを  
深き中か思つてさうり  
いぬさうんてんてん後修として書仏塔と



ゆくと同の道より先の大伽藍滅し新  
なる泥の塔々々八可劫も七沈み之  
を無問の世にや問の字に未あつた  
すしやうしと思つてくもあつた  
二信の胸背より五折しり行みし  
いかに如く実すす後病病病病  
攻まれば比穀山の平井より水と下  
石れ舟に入まじり種とつけし  
水がたたく湯たたく小そ成しう板

爰よりあまうけをくみし  
まはせ給ふすうらりも志はす  
あまを入胸のるよと並み  
地も志はす唯実人事とて  
屋くと計地回至二月甲子日  
地と終る暑地死よりそ志はす  
五の北日入石失折ぬし  
中大成屋の車に地を  
後一天若若百葉の

此清の海をまわす浪をい光中  
にうらそらんそらん年々六十年  
かゝまきうら七十八十まきも持  
まゝいことまきめを老死とて  
あゝ秘中符と歌のりまもい人  
とふまのりよいあゝ身と替  
よ替りんと替りし無れと迷  
使と不塞花とまゝ人衣とま  
梅と黄泉は梅といふまゝ只  
日

他並まゝの飛葉汁を友あゝ人衣  
あゝとていふまゝあゝ秘の回  
山毛の寺人送りのまゝ夕  
まゝ骨といふまゝ此園実  
福尔と木と下流の清い  
つまの葬送のまゝ入る  
西八条の火木と焼くま  
まゝい人衣と焼くま  
行きのまゝいふまゝ



み付くまじり家も冥宮あはく告げく来  
十月廿七日小間魔大王の内裏大極教  
て十萬圓しり十萬人を信と稱して法  
精讀あり事ありその恵も千人救あり  
そ付小御も心可あはく云告と云  
そ寺より村迄修り小塔りまはるま  
不思議あり思ふとさすそ付小御も  
魚睡眠ありゆらも来ゆまは持以堂小  
同族はゆみ法徳あり若号と唱へんか  
か

川務の悲れと念してゆむらう一日  
冥宮あはく村も恵と具足しり  
小間魔大王の内裏大極教と  
よ十万人を信と稱して法華轉續  
そ奉りし法會果てあり  
十万人の僧侶皆して法華を中  
敬あはく未もそりまは小間魔大王  
世にわその作まはる恵りし作  
し華とら世に法徳あり世に懐一切

高生如以乃由乃一偈一句此功德五所  
流經家乃舌根也越五十展轉乃  
法教也八十年此布施也越身  
としそんてて人前我初ありり今小  
部りまては華積不念也未來生不  
と知るは何と七の性生れ素徳と遂之  
こんんとしらりありまは圖魔大王作  
るうの性生不性生の人若信不信も  
也画と修とる志の画乃中隨一舌と

修とる者の別昔前よせりとしんて每  
り所まの世り生れとるは終とあり  
くらまありんひてんて又眞實  
具名はくひてん者りか常ありて  
しりまて思ふとありて事此一とし  
てありまてしとら事ありしは是れ終  
た終事は心信と生る人としんて身  
り由湯仰ありん所ありしは是れ海  
せと終とてまはる魚圖魔大王前

系り時とらりしに圖磨大王作  
と出り國々平家大入に海海と云  
人を世に定てありくく人  
天台の意惠僧心方垂延也未代の意生  
小因果の理と志ありんくおめかりか  
將軍の臣とありきり也  
轉後志ありの海海と云人おめかり  
礼力たるくくあり人とも毎の心  
礼下り也そ文と云敬礼意惠大僧心

天台弘法擁護者示現最初將軍身  
惡業の生同利益と云文と云  
て礼と云り也と云作と云り也  
其の心の中と云法澄と云り也  
てと云り也と云り也  
圖磨宮に東門と云り也  
祇園寺  
其上と云り也相國と云り也  
自河内院のあり也と云り也

ちんちん久若はむむ白河の邊りよ并あり  
筆人一人は座より白河院何とて  
先と中をわかれん常にかき人筆  
さし紙ありまの皆人紙園女侍とて  
うりむ付し又一院に一人教上人  
とて人かかると具して竊しかり  
幸なりうりうりかひ少中れはまあり  
あまりともく林の中とてさしむり  
小比とて月廿六日ある事あり月

ぬる人小卑きくめ坊志くぬ園あり  
みあり古堂に因りてさしむり  
来りては紙えぬり紙とて銀  
針とみまきとてみりて紙とて  
越りてありかき紙ありしとて紙とて  
紙ありしとてさしむりありしとて  
と紙ありてさしむりありしとて  
と紙ありしとてさしむりありしとて  
鬼り紙ありしとてさしむりありしとて





銀の針と磨とありてありてあり  
ううと付皆人咬とを笑てはきり一院  
をと敷読んあうと名武まれん程極不有極  
うううう物あり一実の鬼神とくを思ふ  
はうゆをい老を討て一切を為うと  
ううとふ役あんとよる人と思ふと  
ううと忠風うと秋の格舞とを神あ  
とと物貴とや件乃祇園世帯とを行  
りきりうと女房懐妊志抄ありとん

雨の子男の子とてい汝う子ゆせよ女子とてい  
我とえとよとを作ううと女房程を  
産志抄あり男子とてを産まうと忠風不  
新収毛の抄と養うととを  
思ひまうと女房用打給て養うとと  
ううううと女房と二歳ととと秋  
うと忠風とととと養うとと思ひまう  
か一院徳野指の還清の時紀候と  
いとうととととととととととと

休息のむろ志風うゆれ行首養  
志平こそわし思ひまほあり教の  
中入零餘子とぞおろいふわしとありあ  
内と手し入ま口新の事りあ  
いしうみいふわしゆしをぬし  
とら戸ありまほ一院をわいんぬ  
予ももりて有あひとせよ  
とそ作らう志國幾の王子とて海をぬ  
ゆしとて不解とありら戸ありわあ

あまりのわあふと志ふいまほ志風  
れもよと養せらふ年と思ひまろわ  
一院又の情へ事ぬと條守の神樂  
れいむろわ志風は中と養しとら戸あ  
つとまほ一院

あまの事とて予ももりあまよま  
きうととふの事とてとあま  
と作らまありらわゆしと法  
とい若竹わしとまほ院中と法

我族之人よありて  
作者の三つ七  
て皇位の其清  
大政大臣も七  
及や上も  
これよりこそ  
多る后と大  
石れ子男子

我の地を  
新より男子  
於此室恵和  
國恩死去

二月廿日  
てまき  
契りぬ  
月小失  
乃入

と尸小并のきまわく長志とて内府を信  
何とていふ一種入るれり人医くま  
あまき入る現世乃得言志とて入るす  
とて國恩乃病子母は乃守法國と入院  
病子乃子息重鎮と國恩乃尊身あを  
らぬるちいそれ志のりや正位は太  
伯云まてあうまきうりしそあまそ  
國恩乃母人い懐へまわく秘つくと  
我子れ國恩と病人の志乃し加てんそ新

へと行らうりあつれ乃名しあまそ  
中よりと思てて家人たり積振の  
車と國恩乃病入るいと云言と見  
て是と人し病のあつらひ換り今  
こつら小れゆ病人の類あまそ正三  
命まきうり病人の類あまそ正三  
位乃大伯云中とあまきうり病  
あまこは國恩乃し八条中伯云  
中八代若原前此中伯云基此若原



ら初者人丁ヲ將來とてし一ノ月迄  
仕ていしておわむ人丁はらせし目  
此の神未とそ遂とせう程を少  
押極りうりまはるれあま澄海  
舞の神拍子と合く面白うり物  
此面白くまの神ぬえ人の心  
回又昔て照る神宮面白やと作  
し心事まんと社田石志くま  
昔寛平法皇は儀乃大井川へ  
筆

ろくワ程のりむうり初修るれ由大  
後ち者二乃の子和泉乃大將國子小  
倉山乃所塗くして烏帽子と何人吹  
流るまはる帯と押へて袷しくあけし  
内庭よりまはる中庭と山法乃中由えれ子  
小助玄信部しりり下うりうに衣  
教り烏帽子とあわし大將ゆえ也  
ままそそ日乃の程とそ遂とせう  
世とくそそあまのりて國

河津のくろくろ月を不思致ぬくさるる  
古治承二年の五節と福永とてそ  
ら邊うろろきま教上人の中宮の  
清中と報系戸を相朗祿と権左  
うろろおろ教上人の宗舞のまじり作  
湘浦とあうろや雪敷懸れ治と寝と云  
朗祿とうろろまじりうろろ回恩宮浅き  
う権の事い禁忌しくそ水色あや  
きうろろ七板ありとそそ逃おれうろ

大侍のん昔竟乃清門の娘と三人相好  
と姉と妹と妹の女英と云は舞は治  
口若右小立あつりあつり可舞王うろ  
と七の左多きい茶茶悟乃形をこへ美の事  
二人の右内門の別と悲とあつて茶  
悟の野色よてあつるうろろ淡湘浦れ  
岸の竹よあつるあつるあつるあつる  
て想を相まじりうろろ湘浦れ岸  
あつるあつるあつるあつるあつる

斐ととろろろろあまの幸いなりあるはく  
お義たろろ公あり因縁と名ふふ孝う  
ゆきき人として産るるううたさうく  
志未お徳くう徳の事とてやうとあら  
まろろとこや

あひ

同廿二の中は白皇前此方天将宗風なり  
て法住も久へい筆ぬく中ら作下也  
まの宗風ありあろろあろ内押はしはる  
ぬ

とりまろろとろろは造おまろろ  
おまろろとまろろはつろろあろろ  
たはあろろ年い或いろろ殿は揮舞り  
是れ新元或い福永へい筆ぬくあんとして  
造進とて入進系  
らとへき中らろろは法皇何れ  
あゆはろろゆせ行らす急もはほろろ  
行奉ぬく先お女院の位せろろ  
教院ろろとろろまろろは



毎のころはの境をくろくか付てく心  
漢を進こころく大掖のまき若未失新  
そわ何人の事うたんとく病さく病入彼  
南園西宮のひう北路茂をゆ交り取る  
とく境せくあゆ付てくはもせぬおは  
漢也日と二月一日の目移政ありあ  
の前後と若く床園未寺をよとく  
初りす人き中成作下とあまこふる長  
くわりのころは日東の寺造始り尚奉

行若舟の前後はあ舟行隆とを  
先自の隆八情おまりあひて通  
てお終念補志あむるうかあま  
まらふは景教の法を釋用を内り  
傳ゆあそこのころと良法未東大寺  
舟行の時の毛と帯と七色一と金  
若くはあつらひと若く打強めて尺  
へん別抱あそこのころ行隆の  
下巻くまありのころとく

年始く東寺の寺の申じり道多社  
へともまじ八幡大井此神意少お叶  
新く宿州のくそ目事多し

王後合氣

日と五日。日東國より早馬打る平家  
禪師名漢三人一り中  
勢一万余段毛張園中ん靴入らう中  
と美佐國より目代の中りりりおもむ

平家内いそと少をまやとて大將軍中上  
た兵衛持之盛内大将と戦中此兵衛  
後なる兵衛國嗣は次高島登りとも  
して都合とも勢一万余段同十日あり日  
終るとましく同十五日日美佐國中地  
つ後役の兵衛陣とも源氏と中  
中あり美佐の國中へ素上りの王後  
揮教昇の屋中陣とも源平  
川と澤てくそ満らう其目事入

獨之義者平家乃河の東田と云んや  
思ひもさうん主後七孫也毛つる墨役川と  
打海(昇)の層(行)く(息)と休  
めさせよふ小勢中此(先)司(威)候(平)孫  
斗(と)て(兵)ま(つ)り(志)う(ろ)う(飛)之(と)り(あ)ふ  
身(り)あ(ま)さ(い)あ(も)を(い)ち(と)と(味)り(子)い(こ)ん  
機(の)敵(を)し(こ)い(源)氏(方)馬(取)美(物)未  
子(獨)之(義)女(早)来(れ)我(等)候(と)て(上)云(ん)う  
お(か)は(し)と(せ)り(也)と(言)う(り)竹(も)ま(を)て

是(の)敵(を)あ(ま)さ(い)あ(も)を(い)ち(と)と(味)り(子)い(こ)ん  
真(中)よ(ぬ)候(て)我(行)捕(ら)ん(と)進(む)  
あり(十)百(の)孫(人)無(禪)師(法)法(は)中(氏)等  
行(く)飛(之)討(と)を(義)女(討)と(進)め(也)志  
丹(續)也(其)と(て)源(氏)一(万)金(勢)の(墨)役(河  
小(打)入(ら)る(海)く(ろ)う(平)家(の)中(將)軍(一  
た(志)候(も)得(知)國(鑑)少(ん)り(は)主(と)り  
大(喜)美(と)と(上)く(源)氏(只)今(の)河(海)と(は)  
幣(武)者(い)こ(れ)敵(を)棄(す)る(事)せ(る)を(う)て

年七馬相具乃儒くうとて家七逃  
くこゆひ若くも打たうり御公美  
二時汁飲うと飲ひ入務切く高我  
く討免志うもより為神美清く飲の  
中水碓く入うと飲七務切く高  
八人中あうり時下をれ若次は殺く被れ  
新より十高死人中と人新く叶り  
くや思ひまうん川と海くやうり  
くく平家續く軍役河と打海一高

ゆきの  
ゆきと家七逃若くこゆを若て討捕  
より源氏ゆき若次とまうり高死  
中叶の若死くうら若討て川退く高  
と海くまうりこゆをれ源氏の  
謀思う若くも人よりより十高死人美  
法もゆき若くこゆをれ源氏  
續く尾張の回く打敵く殺く高  
まうり十高死人尾張の回く思う  
と河の回く打退く夫と川の高と











横田合戦

同日八月九日山口に程少僧が顕真の  
上下万民を導く目付社とてひら  
二万部を法華経持積の事あるがけ  
まこと法皇とて浩徳の御名を奉り  
又阿志れりおありせん一院の土を  
作し平氏進討するに中家かきまう人  
平家此ら六波羅に地集くこころを  
しも隆まうう山口ゆゑ又平家山を

美奈りしと平家よすのて山口に隆動  
不測をりうまといは皇弟入軍御  
去程とて平家の中将重衡を二千人  
て小白川まての途とあり法皇公孫丸  
をくしは法皇の御孫入軍御  
平家平家山と責むるに平家一と  
平家の平家と城を命しと平家一と  
ありありも平家と御下ありしと  
御して魔れまういとそ等てころ同日

八日此日改元と云く永永元年と云り  
其の事種々後國の役人機師高師茂と  
名師長と遊するも長官と改修先  
鬼ヶ葺嶽と違をんうおのちと云る哉  
後討伐しよりよ都合を勢二万金銀  
と云すなり一月八月十日信濃國の教  
向横田河原と陣と云る本常は中  
と云るこころ金銀と云る信田機と云  
て横田河原と揮表向う岸と陣と云

平平乎川と降てとよの本常宣  
ひよりい勢伸く軍代吉削と云る七  
おの事こころと先しと井の事高師長  
五百金銀と云る別と云る海と云る  
より海より平平と云る所より打入  
海より平平と云る所より打入  
大勢と云る事と云る先陣と云る  
より勢津の領瑞坊村と云る事  
本常勝か高く攻めし故高師長

曾よ子痛く攻めしむ村を去りて  
いふころ未曾孫頼朝と責まれば城の  
守島は勢二万金銀といふも一は  
高の村ももたぬて行くと単已に頼朝  
よきり城の守高叶りしや因らば横田川  
小丸入るれをと潜て城を搦めし  
ころ城の守島部へ早馬と走りし中  
ありしは平家時之輩とやと云ふいと  
孫頼朝十月十日十三日の中前右大将守盛

乃島内大石と上り新小島六人前驛あり  
敵上人十三人色遣せしは皆我  
わらうとせありしを獲し集むるやとそ  
しるる東園小園格のしるるは近合も海  
西海の源氏を敗れ城へ攻入ると云ふし  
うが平家いれり吹屋人浪り立身人  
とてあらずは明書に述敵くは存るなり  
傳運り格うりしは行々年々とて  
永く二年の事なり

平家物語卷第六

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

慶長八年癸卯二月八日

佛堂筆授取稿

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

